

TS（トータル・サティスファクション）の実現を目指して③⑤

「自分は何様？」と自分に問う力

校長室担当より

2022シーズン限りでJリーグプロフェッショナルレフェリーを退いた、家本政明さん。サッカーファンなら今でも様々なサッカー番組で顔を拝見する方ですが、この方についてお話をします。2008年3月1日、私がこよなく愛するサンフレッチェ広島が鹿島アントラーズと対戦した試合のレフェリーが家本さんでした。PK戦の末、サンフレッチェが勝利したことは私としてはよかったです。試合自体は、イエローカード11枚、レッドカードで退場になった選手が3人という大荒れの状況でした。マスコミからも大バッシングに遭い、この試合のレフェリングは問題視された上で釈明会見を余儀なくされ、審判委員会からは、「冷却期間が必要。割り当てられるチームと家本主審、どちらにとっても不幸」と判断され、当面の審判割り当てが停止という事態になったのです。また、自宅には無言電話が掛かるようになり、「辞めろ！」と書き込まれた匿名のメールも届いたそうです。あたかも犯罪者のような扱いに、精神的に追い込まれたその時のことを思い返して、家本さんはこのように語っておられます。「『どうしてこんなに叩かれるのだろう』っていうのはありましたけど、自分もあの出来事に真摯に向き合い考えなきゃいけないと思いました。」それでもレフェリーを辞めることまでは考えなかったそうです。「もし辞めたら、失敗を取り返すチャンスも、サッカーをもっと良くするチャレンジも全部放棄することになるじゃないですか。それだけは絶対にイヤだったんです。いばらの道かもしれないけど、辞めるという選択は違うだろうって。」そして、2022年レフェリーとして最後のJリーグの試合で、サプライズ。横浜F・マリノスと川崎フロンターレの選手による花道で、拍手に包まれて登場した家本さんは、両チームのキャプテンから記念ユニフォームを、妻と2人の子供たちから花束を受け取り、スタンドには「家本さんJリーグの魅力を高めてくれて有難うございました！」「いえぽん（家本さんのこと）、お疲れ様でした 次の笛をさあ吹こう！」と横断幕が掲げられていました。「パパ、すごいね。」という子どもさんからの言葉はなおさら家本さんの心に響いたのではないのでしょうか。

「歩き出せば転倒のリスクはある。だからといって立ち尽くしていたのでは、つまづくこともないかわりに前には一歩も進めない。つまずいていい、失敗していい。」というローゼンバーグの言葉を、口で言うのは簡単なことだ、成功者だから言えるのだと思ったりもする方もおられることでしょう。でも成功と失敗は対極にあるのではなく、失敗やうまくいかなかったことこそ取り返す行動こそが自らを成長させ、成功へ近づけてくれる。投げ出したり、あきらめることなく、失敗という「波動」を逆にとらえてこれを乗り越えるたびに、技術だけでなく生き方も上手になっていき、時には「感動」というご褒美が得られるのは事実だと思います。

そしてもう一つ。Jリーグの観戦に行った際に、純粋にサッカーを愛して応援に来ている少年少女たちの目の前で、「おいおいレフェリー！何で！いい加減にしてよ！」と声を荒げる選手やファンには人間として呆れてしまいます。人間ですからミスジャッジは起こり得ますし、あくまでも高校サッカーでレフェリーをしていた者として言えることですが、純粋に選手たちのためにと厳しいトレーニングを積んだ上であんなに激しい業務を行うレフェリーが、悪意を持ってジャッジを下すことは考えられません。ただ、私たち人間は、実は「許すこと」が苦手です。逆に「責めること」は得意です。そして相手の失敗やうまくいかなかったことを「責めること」は時としてこの家本さんのケースのように、同調圧力となって人の心を痛めつけることがあります。そんな時こそ、責める気持ちを他者へ向けるのではなく、まずはぐっと受け止め、「自分は何様？」と自分を客観視して問いかけ、「責める」行為を自分の判断で止める器の大きさを身に付けるチャンスです。

サッカーの審判の世界では、「最高の試合とは、競技者同士、審判、そして競技規則がリスペクトされ、審判がほとんど登場することのない試合である。」という言葉があります。本校が目指す「トータル・サティスファクションの実現」も同じです。トラブルがあったとしても、本校に関わるすべての人が、お互いの想いを純粋に共有できるよう人間としてのルールがリスペクトされ、誰かに指摘されなくても非難や暴言、強制や押し付けのような行為が登場することのない、ウェルビーイングな職場、そして社会を目指していきましょう。(令和5年6月5日)